

俳句雑誌



空

令和4年2月25日発行

第15巻6号

通巻第100号



2022・1・2

**SORA** 100号

天辺

柴田佐知子

茸狩危ふき方へなほ進む

母と一步支へて数歩鳥渡る

よく晴れて人呼んでゐる枯木山

紀寿と言へば驚く母や冬ぬくし

鯨立ち上がりし海の乱反射

脱皮せしやうな少年セロリ噛む

冬薔薇恋のはじめは少し演じ

与するも佳し天辺の鷹になら

焚火消えみんな小さくなりけり

夜も走る獣の山や生姜酒

解禁の途端に真鴨撃たれけり

忘れたきことまざまざと霜夜かな

雪だるま目鼻もらへぬまま暮るる

独り身を一人で思ふ葛湯かな

雪をんな雪の玩具を子に作る

おとなしく水となりゆく雪兎

福岡 高倉 和子

一礼の影の正しきお正月

踏台を据ゑて若水供へけり

鉄骨の柱に注連を括りたる

北風に非常階段細りけり

納屋に吊る鎌や帽子や冬ぬくし

檻樓市に老眼鏡を取り出せり

用の無き人も来てゐる焚火かな

狐畏息づく闇が囲みけり

東京 中田 みなみ

川崎民家園

富士初雪無花果青きまま萎み

今年こそ逢はむと逝きし賀状には

嬉しさの始めに餅の焦げ具合

繭玉へ風を連れ来し湯治客

地獄湯を出たる卵に初霰

雪霏々とアイヌ刺繍は魔除け柄

潮ひびく道へ或る日の雪女

澄みしまま海へ出る川尾白鷺

長崎 荒井 千佐代

秋の川出合ふところに常夜燈

早稲の田の穂ずれや夜の雲流れ

蜂蜜をすくへば重し銀杏散る

雁風呂や波音ひとつせぬ日なる

虫しぐれ一つ嫌ひな音のありぬ

十字架の影のいびつや水の秋

母逝きし原爆病院鳥渡る

雁渡し十字架の主に会ひにゆく

埼玉 服部 早苗

閉門ののち紫陽花に雨の降る

電球に傘ありしころ火取虫

打ち水の桶ぼんと打ち終りけり

処暑の日の射して理科室の静寂

実むらさき恋の初めの淡き色

唐棧の端切れを敷きて月の膳

筆跡に見ゆる息継ぎ秋高し

天に地図ありけり燕帰りけり

北九州 深川淑枝

今日よりはひぐらしの樹よ雲白し

ひよんの実の笑ひそこねのやうな口

落し水背山の風の音加へ

葦刈女ほとまで水に踏み込んで

山の上の星の赤らむ秋出水

木犀や水音の高き夜の暗渠

籠り居の芯に昼鳴くちちろかな

長き夜や押花本をすべり落つ

広島 戸栗末廣

向日葵は顔のうしろは見せぬ花

鮮しき風立つ十日詣かな

しんかんと午後の風待つ立葵

菩提樹をしつかり掴み蟬の殻

帰省子に童のやうな山の形

確信の色と思へり秋茄子

先頭はめでたき齡盆踊

川釣りの糸さつと投ぐ銀やんま

福岡 角野良生

よき石によき雨が降るかたつむり

睡蓮の花みな水の上一寸

子子のぼうふらといふ踊りかな

夕立に後姿のありにけり

水のごゑ岩のごゑあり瀧落つる

こんにやくの刺身三色山滴る

薄翅を淫らに仕舞ひ金亀虫

銀の径を残せりなめくぢり



太宰府

山本則男

甕棺の底にこぼろぎ鳴いてゐる  
 本堂に痩せし座布団昼の虫  
 水といふ掴めぬものの澄みゆけり  
 生ひ立ちは通草採りより始まりぬ  
 老人になりにゆくなり敬老日

大野城

森田明成

蝉の声まとめて放つ鎮守かな  
 つかみやすき手首足首夏終る  
 吹き降りの中を自在に秋燕  
 伸び放題となりし我が家へ小鳥来る  
 参道のごとし左右に曼殊沙華

直方

石橋幾代

ねんごろに水打つてゐる理髪店  
 大降りのあとの青空夏祓へ  
 休まする船に盛塩浦まつり  
 曼殊沙華つらなり山の痩せてぬし  
 病室の窓に流星またひとつ

兵庫

えとう樹

朝顔を数へて数を覚えをり  
 萩の花こぼして走る遅刻の子  
 唄ふごと名を呼ばれをり秋桜  
 椿の実鉦脈尽きて村消えし  
 人のごとももの言ひたげな鹿の目よ

岡垣

田中とし江

夏わらび有線放送声若し  
 谷川に鮠の群透く夏休み  
 兄追うて浅瀬を渡る捕虫網  
 雪溪を歩きし夜の出湯かな  
 つるべ縄引けば蛾のたつ日暮かな

福岡

秋津令

地滑りの山に向かひて稲を刈る  
 露舐めて野良猫のまた歩み出す  
 赤い羽根つけし犯人逮捕さる  
 毛糸編む母の寝息を聞きながら  
 木枯やこけしの胸に傷一つ

粕屋

吉田葎

虫の音や遺して死ねぬ文の束  
 信長の似絵なで肩鳥兜  
 熱爛のまはる弔辞を書き上げて  
 黒板を叩く指示棒冬に入る  
 ラグビーや口も額も腫れあがり

北九州

兒玉充代

秋の野に犬を放ちて犬を追ふ  
 貝卸きらりと後の更衣  
 反省を後悔とせず居待月  
 ふるふると虫の鳴きだす雨あがり  
 秋の蝶草に沈みし無音界

北九州 河原敬子

トラックで城濠に来る藻刈舟  
 菱の花群るるなかより亀の首  
 蟻つぶしし二本の指のしめりかな  
 草を揺らすは草色のぼつたの子  
 ばらばらのひとかたまりや鳥渡る

直方 曾根富久恵

丁寧に包丁使ふ夜の秋  
 秋出水雲を引き摺り下ろしたる  
 墓掃除無縁墓まで及びけり  
 質倉の屋根は直角秋高し  
 反りながら雨の案山子となりにけり

長崎 松尾龍之介

いつ何処のプールも同じ声と音  
 風美し蓮田の上は空ばかり  
 桐一葉サクと碎けし遊歩道  
 閻魔こほろぎトレモロを得意とす  
 桔梗や何ゆゑ星の五角形

粕屋 あき千晴

仏彫る鑿の一打や蟬時雨  
 潮騒を闇に聞きぬる秋はじめ  
 仲秋や地蔵の頭まんまるし  
 満月の夜も降りつぐ火山灰  
 去来忌や水音近き茶花摘む

熊本 松田明子

濡れ縁に西瓜の盆の運ばるる  
 回廊に据ゑ甲冑のお風入  
 焼酎は芋しか知らず生身魂  
 朝顔の葉に隠れたる花の数  
 虫追ひや村のはづれに火を落とす

福岡 永淵恵子

青北風や波止に救命浮輪箱  
 防人の海はま青や新松子  
 島の刻ゆつくり流れ鳥威し  
 窓枠にペンキの匂ひ小鳥来る  
 木を叩き父がどんぐり落しけり

福岡 栗原京子

夕焼雲入江を埋むる漁師町  
 栄螺売り鬘肩の家の裏木戸へ  
 烏賊を干す串で形を整へて  
 烏賊を干す青空に腕ぶらさげて  
 鼎談の過激になりぬ冷し酒

千葉 原友子

鬼灯を揉み空襲を語り出す  
 駈け来たる髪より夕立のしづく  
 峯雲や隙間かしこき波殺し  
 朝顔の道外れしは巻いてやり  
 涼しさや皿も小鉢も二つづつ

大阪 田岡千章

大仰な河内言葉や夾竹桃

稲光翁はすでに吼ゆるなし

持て余す暇の充分花木權

某の死去を残暑の掲示板

一日の余白を尽しかなかなか

福岡 あさなが捷

完全武装で夏草へ切り込めり

蝉時雨ねむりしままの宮参り

Tシャツのゆるびなじみて夏終る

まつ直ぐ咲きまつ直ぐ枯るる彼岸花

風立つとふくらんでくる萩の庭

大阪 井上和子

根の国の真白き神馬涼新た

蠶に弾くる雨滴秋はじめ

子規庵にて鶏頭の種授かりし

麻服の皺しみじみと衣紋掛け

地下鉄の切符失ふ夏手套

直方 吉田悦子

幼な子のにぎはふ家につばめ来る

縁側に兎の忘れたる捕虫網

幼な子が鳥に差し出す赤のまま

筑豊の色に出でたる曼殊沙華

枝折戸の膨らむほどの秋の雨

東京 山田正子

コスモスや鍵と小銭と単行本

一片の雲残りたる麦の秋

膝を折る土手の小さき草の実に

背泳の雲の流れを追ひ越せり

仏壇の奥に勲章蟬しぐれ

東京 今井康子

本郷にカレー屋多し金魚鉢

花見小路簾に透くる灯の赤し

開きたる樹木凶鑑や小鳥来る

生き生きと老いて柿干す一日かな

正解は自分で決むる秋の潮

兵庫 青木朋子

曼殊沙華女流といふ語要りません

新じやがへピンクソルトを砕き振る

虫の音や手縫ひを終ふる糸切り歯

稲車右に左に姉いもと

ベランダにひとり切る髪小鳥来る

兵庫 大西乃子

新涼や道に聞こゆる竹刀打ち

白壁に旧家の重み秋桜

彼岸花女はきれいな嘘をつく

清張の謎解いてゐる夜長かな

一本の糸に縋りて親無子